

集團健實性の問題

小笠原 秀 實

第一章 理想、實踐の組織關係

一

極めて冷靜に、あるべき筈であるといふ理論的推定に依つて、僧と俗、世間と出世間、出家と在家、證道と產業など、かゝる一聯の對立關係を考へ、次で若干の歴史的記錄に及びたいと思ふ。

二

佛敎は三寶として全體の組織が綜括されてゐる。佛寶、法寶、僧寶である。これも敎義學的な諸規定を離れ、極めて本質的であり、理解し得べきものとして定義付けたい。

佛寶は最高至上の價値であり、又その實現者である。自覺覺他といふ説明も畢竟最高價値として定立されねば、何ういふ目標にもならぬものである。自覺はしたが迷の自覺であり、覺他も實行したが、憤激を誘發するに足るといふやうな覺は、この場合最高價値性の乏しいものとして排除される。不幸にも近代的自覺とか、自我の自覺とか呼ばれる場合には、

往々覺が格闘的、憤激的、權益擁護的の意味に使はれ得るのである。かの駱駝の精神が獅子の精神に變り、自我の爲に、我が權益の爲に吼えたてたといふ近代自覺の寓話は、覺ではあるが、道程的のものであり、最高價値を以つて許すべきものではないのである。

最高價値としての佛寶の覺は、自己完成のものであり、これ以上何を求めねばならぬといふ缺乏性を離れ、自己充足、歡喜、康樂の本質を實現してゐる筈の存在である。かうした精神の本質を完全に實現してゐる状態は、たゞ特殊な人々にのみ許され、他には拒まれても仕やうが無いといふべきものではない。精神の本性に従ひ、その本質を實現することの外に精神としての目的は無い筈である。麥の芽は伸び上ること、花咲くこと、實を結ぶことが本性隨順であり、價値の表現たるべきである。咲いてはならぬ筈、實のつてはならぬ花のあらう筈はないやうに、完成し、自足し、歡喜康樂境に圓成するのが全精神的存在者の目的であり、本性表現である。佛寶とは、このあらねばならぬ本性表現の生ける状態である。これが拒まれていゝ筈はなく、又これに對して、有利、不利の道程が人爲的に區別されていゝ筈もあらうことではない。悉く均等なよき條件に於て、一樣に究畢價値實現に向つて發足すべき筈のものである。

三

法寶は至上價値たる佛寶に到る理論、方法、教説であり、この理論と教説とを信じ、如實に修行する人達が僧寶である。従つて僧寶は佛寶が最高價値たることを信ずること、これに到着すべき教説方法を信ずること、この二つの信仰に依り、又理解に依つて成立するのである。

三寶なる三つのものの組織關係は、然しながら、佛教に限られる筈のものではない。すべて善きもの、それに達しなけ

ればならぬといふ要求の生れる處には、必ずこの三種のものの組織が成立する。善きもの、善からざるものの對立に於て、善からざるものは、善きものに成らねばならぬからである。こゝで善きものの性質が規定され、何故にそれが善きかの證明が必要である。そして又それが到着可能であること、その方法はかうしたものであることの明示が與へられるべきである。これらの證明が納得され、その必然が了解されることに依つて現實的行動となるのである。理想、理想への方途、實踐、この三段の構へは如何なる實際運動にも具備されてゐる。必ずしも三寶に限られるべきものではない。それは宗教的、道徳的といふやうな精神的實際に限られるのではなく、政治的、經濟的といふやうな肉體的、物質的の諸運動にも適用される。のみならず、精神性を極めて壓縮、抽象してゐる技術的な面にも及ぶ。運搬機關たる車の構造に關しても、勞力を省き効果を高めるといふものが想像されるならば、それが理論的に如何にして可能なるか、又如何なる技術方法に依つて達成すべきか、このことが明瞭化することに依つて實行に着手するといふことになる。

四

理想、理論、實踐として三寶が了解される限り、その特殊性は失はれる。暫くこの特殊性を離れ、一般的通則の眞髓に觸れ、然る後に之の特殊性を検討することが方法的であり、又學術的たるのである。

理想と實踐との間にはこの三段の組織が必要であるが、精神的理想一般に關しては、物質的、技術的な洗煉とは趣を別にするものがあることが見出されねばならぬ。そこにはさまざまの相違を擧げることが出来るであらう。然し些事は別として、技術的なものはすべて部分的であり、方法の一部に限局されたものであり、手段としての領域に止り、全生命の根本的目的が標準となつてゐるのではない。宗教、道徳、更に政治、經濟の如き諸現象は、大局に於て人間生命の全局に

關聯し、人は如何にあらねばならぬか、人間の幸福なるものは何に依存するかの問題に接觸してゐる。單なる手段の満足に於て停止するのではない。政治と經濟とは從來、物質的、肉體的要求方面が重視され、精神と道德とから別存してゐるかの感を與へる場合さへも見出し得られるのであるが、嚴密に考究することに依つて、決して單純に定義付けられるものではない。政治、經濟中に道德性、精神性が多量に含まれてゐると同様に、宗教、道德中にも、物質性肉體保存持續性なるものは相當高率に含まれてゐる。組み合せ、絡み合ひの方式に於て程度の相違が見出されるといふだけのものである。

例へばルーテルの宗教改革は、聖書に歸り、神の言葉に歸るといふ純粹な精神上の問題であり、心靈の解放であつたが、それはやがて政治的運動、經濟的争鬭とも密接に結合してゐる。清教徒の純粹な宗教的信條が、やがて亞米利加の獨立となり、又その經濟的諸制度を支持してゐるといふ部分をも見落すことは出来ない。我が鎌倉期に於ける淨土教、禪宗の勃興は、教理的には先行教派の超越性を批判したものであつたが、同時にそれは武士、農民の經濟的、政治的勃興に必然の關係を持つてゐた。佛教教理史として解釋すれば、武門の成立、地方農民の進出は助縁であり、條件としての刺戟に過ぎないのであるが、經濟史、政治史としては、新佛教の興隆が新施設、新法度、新諸制度の不可缺の條件であつた。學的關心の重點相違に依り、主件處を替へるのであるが、部分的關心を離れ、事實そのものを冷靜に觀察するならば、誠に複合的であり、何處までが宗教か、何處までが行政か、分界甚だ困難である。たゞ思辨的傳統の結果、一つを精神と呼び、他を物質と唱へてゐるに過ぎない。そしてこの錯綜が單なる錯綜たるに留らず、過誤と災厄と、夥しき犠牲の悲惨をも誘導するのである。分析省察の必要なる理由である。

政治、經濟、道德、宗教の間には格段な相違ありと區劃されてゐたものが、程度上の區別となり、更に佛教、基督教、儒教といふやうに、相互に譲り能はざる原則が想定されてゐるのに、これも亦密接せる度差に過ぎないといふことになれば、これらを如何に整理するか、新しい難問となる。

これらの相違は畢竟、最高價值としてゐるものの性質に依つて規定される。佛教の眞性を規定するものは佛寶の外にはない。基督教の本質を決定するものは至上存在の神の性質に歸着される。佛と神との間に一定の區別ありとすれば、その點が各の特質をなし、又一定の共通ありとすれば、その點が各を同一範疇に統理する。同様に宗教と呼んでゐるものの最高價值、云はゞ精神的法悦に重心があり、他はそれに附隨する條件であるとするならば、この點が他の政治、經濟と趣を別にすると了解される。政治、經濟の理想はもとより精神としての幸福も考慮されてゐるが、歴史的並びに理論的諸要求よりして、肉體的、生理的存在維持が重要基體をなすといふことにある。宗教の自由は進歩的政治組織に於ける提言であるが、これは精神内部の歡喜、幸福を宗教的なるものの領域に託せ、自ら肉體性、生理性の基體維持を重點として、これが整理に専心しようとするのである。従つて政治は宗教の自由を許すと共に、「公安に抵觸しない限り」といふ制限を加へてゐる。公安とは一般的生活の基礎的安全性であり、外面的規約尊重に關聯するのである。

宗教は個人心靈上の些事である、國は重大な公安維持の任に當つてゐる、この公安尊重の爲に個人の心靈要求は時に依つて讓歩されるべきである。これが政治としての最高集結體が個人に向つて制約してゐるものである。又「信仰は阿片である、病的陶醉を誘導し、精神への害毒である。」かうも提議される。宗教と政治との間に讓し出される摩擦は概ねこの種のものである。このことも別に奇異の現象ではない。宗教が専ら個人精神内面の満足を求めようとするのに、政治は生理的、一般生存的公益を規準にすることより誘導されてゐるのである。この摩擦の是非は専ら個人精神内面の歡喜満足性

が健全であるか何うか、一般公安として樹立されてゐる外面規約が不偏不黨の健全性であるか何うかに依つて決定されるべき性質のものである。

六

かりに個人心靈の満足としてゐるものが、一つの錯覺であるとか、やがて一身を壞すのみならず、他のすべてに有害的であるとすれば、かゝる宗教性は誤謬であり、非違である。「信仰は阿片なり」の提言が該當する状態である。公安抵觸の理由に依つて、これを抑制し、内面の歡喜を正しき方向、精神本性隨順に向けねばならぬ政治的な義務がある。これに反し、精神本來の性能に隨順し、あらねばならぬ内面の眞實を實現し、このことに依つて歡喜康樂を獲得してゐる生存者に對し、このことをやがて阿片的陶醉視し、公安の名に於て束縛するが如き政治態勢ありとするならば、それは行政的過誤である。それは内性の本質たる歡喜康樂であつて、すべて生きること、生存することの究竟目的たるが爲である。この場合、公安なる一般的社會規約なるものが、本末の由來を誤斷してゐるのである。

公安とは個人心靈の健全なる充足を離れて成立すべきものではない。個人はこのことの満足の爲に、條件として社會を構成し、規約を結び、これに公安なる概念を附與してゐるのである。公安は影であり、個人健實なる内性展開が人間としての實體である。影の爲に實體を苛酷にも彫鑿しようとする。誤謬の中に在る。

近代諸政態は正閭さまざまを展開させた。種類と段階とに於て頗る多數である。然し概ね生産機關の一大發展に眩惑し、物質的快適の豊富に誘導される傾向を強化し、内生内觀の康樂を失墜する憾を露呈してゐる。政治、經濟は理想として比較的、生理―肉體幸福を目標として公安の考を練り、宗教、道德は精神―内生の康樂を本質として公安の根源を指示

しようとしてゐる。共に人類の幸福を標示することに於て一致的であるが、重點と組織とに於て相違的である。甚だ不幸なことは、これらの雙方若しくは一方が内外の關係に關し健全なる理論を支持してゐないことである。賢明を自信して兩首の各が是非を論定しようとするが如き悲しき漫畫相が莫大な犠牲の慘事にさへも立ち到つてゐるのである。信仰としての阿片性からの解放も完成せず、生存目標の健實把握に依止する公安性も微弱である。會議といひ、統制と云ひ、又自由と云ひ、組織といふ、すべて生命の本質を遊離し去つて、形式と概念との模索に始終してゐる。理想と理論と實踐とに於て一大齟齬を現出し、佛法僧の三寶は、教の内外に於て寧ろ混亂そのものの狀貌を呈示してゐるのである。

第二章 法施と財施

自覺覺他にいろいろ教義學的な意味があるにしても、これが人間として最高價值であるとするならば、悉くの人々が到着、實現しなければならぬ筈である。もつともその最高價值たることを信じなかつたり、それへの方法について疑惑を懷けば別である。佛の尊貴を知り、教法の正確を信する者は、残りなく至高目的に到着さすべきが教法としての本義たるべきである。就中佛教はすべての人々がこの究竟頂に達し得られることを認め、種姓、貧富、貴賤の差別を置かないのである。それに何うして僧寶なる特殊實踐者、實踐教團が創定されることになつてゐるのであるか。この問題は歴史關係、社會關係、時代一般の通念などに關係することからである。理論として單純に推定するならば、信するもの、學ぼうと欲するものは悉く實踐者としての僧寶的性質を具備してゐるのである。

こゝで世間對出世間、在家對出家、産業對證道の問題が概括的に解釋される。世間、在家、産業は一聯同性のものであり、出世間、出家、證道又同様同質を表示してゐるからである。

最も根源性をなすものは、佛寶としての至上價値が精神的完成より來る幸福淨悅たることである。かりに生理∥肉體的幸福が主要目的であり、極めて多様な諸慾望の極めて高度的充足にありとするならば、恰も近代機械産業的多産と高度刺戟性創造といふことに進むのが一つの傾向であると觀測される。然し佛寶はさうした性質のものではなかつた。それら諸慾望の爛熟的充足は自己矛盾性を持ち、高度化するに従つて崩壊性を持たねばならぬといふことが明瞭に意識されてゐた。それは經驗の省察からも當然生れ來るものであり、又論理的推定もこのことに及び、更に歴史的傳統に於て、すべて賢人道なるもの、自覺道なるものの遺産でもあり、有力なる文化財たるべきものであつた。佛教またこの賢人道の繼承であり、貴重なる文化財の相續者たることに於て文化史の正統展開者であつた。

生理∥肉體的諸慾は強い、そしてこれはやがて苦惱の因となる。この誘惑を遮斷し、精神の平靜、即ち證道を實現する爲には、因果を明察照見する知能を磨かなければならぬ。そして又知能の命ずるものに従つて、強力に戰つて行かねばならぬ。知能を磨き、複合せる因果關係を洞察し盡すことは困難であるが、更にこの結論を嚴守し、迷はされ易い生理∥肉體要求を克服するといふことは一大努力である。容易に達成されるべきではない。産業に従事しながら、又家族的生活の諸事に忙殺されながら、特に誘惑の渦中に浮びながら、生理∥肉體的諸要求、所謂五慾なるものの爛熟性を離脱し、知能と意志との健全に於て、精神至高の價値を獲得するといふことは寧ろ絶望的である。選ばれたる稀少の天才的性格に向つ

て偶々望み得るにしても、すべての人々にこの難事を強ふることは全く不可能事である。分業的差別が採用されるより外に道はない。産業、家事、世間を離れて専心に精神の純化向上を求むるもの、これに對し専ら産業、家事、世界諸事を營み、精神的求道者、出家修行者の生活を支援すると共に、それらの人々から精神的指導、教養を分與されるといふことになるべきである。法施を受けて財施を致し、財施を受けて法施を布くといふことが世間と出世間、教團と一般在俗界との相互保全關係である。

三

生産に關しては分業が許され、このことに依つて多大の進歩と勞役が省かれる。この關係は正しい。然しこの分業なるものは生産に關し、技術的分化、洗煉の要ある場合に認められる筈のものである。人格の完成とか、人間理想の完全實現とか、特に精神の内面的純化といふやうなことに、分化分業の行はれていゝ筈はない。或るものは肉體の鍛鍊に依つて肉體だけは強壯にし且つ偉大にしたが、精神としての修養を閑却し、推理力、分析力等認識に於て、趣味性の鑑賞に於て極めて低劣であるといふ場合、これが健全な状態として許され得るか。又これに反し精神的煉磨に傾注し、身體の壯健を閑却し、病弱不健全な状態を現出することも、人格の完成として許し得るか。心身ともに併び完成して初めて人格の健全に達するのである。肉體煉磨の専門が誤謬であるやうに、精神修養の分業的偏重者があつていゝ筈はない。これは分業すべからざるものを強いて分業化するといふ錯誤の状態である。現在この傾向を露示してゐる現象は甚だ多い。一般に行はれ勝ちではあるが、理論的に誤謬なものは何處までも誤謬である。これは一つの例に過ぎない。

精神的完成を期し、佛寶を實現する爲に出世間的教團を組織し、それが生存の基礎なる産業を拋棄して他に依託とする

といふことは、心身の修練を分業化しようとするものと類似してゐるのである。他面産業を引受けたものは、そのことのみ忙殺されることになり、特に精神としての教養を高める餘裕を持たない。全産業の勞役を省き、専心誠意に求めても難解難證の佛道を、働きながら、生産に没頭しながら完成さすといふことの出来る筈はない。法施と財施との互融は一應の解釋ではあるが、このことの裏面に人格の統一的完成を失つてゐることを凝視しなければならぬ。

このことを禍根として、時代に依り種々の餘弊を呈示した。ある時代には精神的教養の優位性が尊重され、殊に身分的優越に結合し、出世間性、證道悟入性が著しく尊重され、生産性、世間性、勞役性が賤視された。尊重される側には不當なる自負と傲慢と放恣とを誘導し、賤視される側には自卑と、卑窟と、物慾溺惑、非人間的野獸性をさへ増長させる機縁を與へた。殊にこれは精神的なるもの、目に見えざる不可知的靈力が全人間の禍福を支配するといふ超越力信仰時代に於て一般化した。然しかゝる信仰の動搖と共に、著しく現實化し、目に見えるもの、感覺に上り來るものを重要視する傾向を見るに及んでこのことの逆が擡頭して來た。生理||肉體的基礎を與へるもの、生産的物資を作り且つ持つものの能力は、朦朧たる不可知的靈力、精神的純化の機能を輕視することになり、自ら一切の支配者たることを自覺した。その實力は現在の生存を左右し、意に適せざるものには物資の供給を拒み得るといふ權能をさへ具備するに到る。この情勢に於て、崇高なるべき筈の精神的教養者は卑窟化し、隸屬化し、幫間的媚態を以て物資の施與を待たねばならぬ。無くてはならぬ必需物資を呼ぶ爲に、招かれざる法施を強いて押しすゝめなければならぬ。自卑たらざるを得ないのである。「働かざるものは食ふべからず」の提言を前にし、働きながら働かざると同視される逆運に置かれる。かゝる諸弊害は専ら分業すべからざるものを、分業の形に於て展開させた傾向に端初する。

現在の情勢は、幸か不幸か、生産物資多額把住者の力を強化してゐる。精神的證道の道にあるもの、法施に依つて財施を呼ばねばならぬもの著しき苦難期にある。そしてこれと共に物資多額把持の側には、精神としての空虚、生存の本義に關する不可解と感覺的爛熟、暴戾と殘虐との惡魔主義的頹廢、かうしたものが著しく擡頭してゐる。衷心、不安と焦躁とに驅り立てられてゐる悲壯をも看過することは出来ない。一層悪いことはこの種の苦惱が制度化し、組織化し、法令化し、産業と證道との正しき關係を盲動化してゐる機構そのものである。

現在の生産機構に關する餘弊はさまざまの點から指摘されてゐる。不安的であり、焦燥的であり、世界競争的な大悲慘事にさへも展開するからである。生産は無くてならぬ必需物資を産出することであり、餘力あれば壯麗化するに足る資料を生産することである。このことに何の疑惑もなく、又何の過誤もあらう筈はない。さうした健全な意味ある生産が何故に最大兇變なる世界戦争の如き禍亂にさへも及ぶか。結局生産の目的が明瞭性を缺いたからである。現在生産の目標は利潤獲得にあり、必ずしも公益増進の爲ではないと云はれてゐる。公益を目的とすべき筈のものが何うして他の方向に偏局することになるか。生産物資そのものに、效用としての精神性が喪失されてゐるといふことに關聯する。效用は勞力の所産であるといふ分析は正しい。然し效用そのもの、消費財中に含まれて需要性、快適性への分析は未だ殆んど顧みられてゐない。需要にしても、快適にしても、健全性あるものと、不健全、病的性をさへ含むものとの區別が見出される。健全、不健全の批判をせず、一般に需要的なるものが、需要的なるが故に生産され、そして利潤に拍車することになつてゐる。このことはやがて人間生存の目的が明白にされないことに起因する。生きることの眞髓は五慾惑亂的、爛熟頹廢し易

き感覺慾の飽滿にあるのではなく、精神的康樂の純化にあるといふことを忘却することになった。約言すれば佛寶の本質たる精神的純化があまりにも産業の部面から遊離遮断されてしまった。この理想を喪失したことが全世界を暴戾化し、戰禍をさへ恐れざる窮狀に誘導したのである。即ち佛たることが人間の理想であることを喪失して、生産の末に走つたのである。この誤謬的な歴史的徑路が佛寶を餘剩存在として僧寶に中間、幫間性を與へた。禍根は誠に遠い。目前に問題化されてゐる僧俗の分離、一致の如き宗教界特有の小現象とは趣を別にしてゐるのである。

このことはやがて宗教、政治、經濟の區別を混同するものではないかと疑はれるでもあらう。然しそれらは別々の現象ではなく、一人の人としても、全社會の存立としても、一つに結び合はされ組織化されねばならぬ存立の必然性を持つ。政治を離れて經濟、宗教なく、又宗教を離れて政治、經濟のあらう筈はない。目的を喪失して手段の爲に手段を練るといふことが、各文化部門の自恣性となり、人類を類癡に導いてゐる。禁斷を犯した原罪は、生命の眞髓を忘却し、手段の爲に手段を模索するといふ分裂の先天性擁立の知慧の實を味つたことにある。知識が悪いのではない。全體を通觀する知識能力を抛棄し、部分的專業化さうとする幽閉知が悪いのである。それは政治と經濟とに目標を奪ひ、宗教、佛道に依つて以つて立つべき物質的基脚を破壊し去つた。一部教團内の混亂ではなく、全世界機構の難局である。

最初に理想、理想擁立並びに實現の理論、實踐、この三段の區別を以つて佛法僧三寶の意味を規定した。そしてこれは單に限られた佛教の問題ではなく、あらねばならぬ全社會、全世界の組織關係として了解した。政治、經濟、宗教の別の如きは理想とするものの相違である。従つてそれら理想そのもの、正閏、是非を批判し系統化することに依つて、これら諸現象の統一的組織が見出される。現在機構の混亂は、産業面から、あらねばならぬ佛寶を喪失したこと、精神的自己目的、內的康樂を失つたことに起因する。この目的を或る度に於て認得してゐる僧寶は、産業の基體から遊離してゐる爲め

獨自の生活を立て、規範を全世界に示すことが出来なくなつた。中間的浮浪性に於て無力化してゐる。たとひ先天的原理を擁立し、宗教の獨立性を主張するも、現象としては僧寶の俗權屈從に出でざるを得ない。五戒の第一に不殺生戒を掲げながら、好むと好まぬとに拘らず、侵略戰爭追従の媚態を避けることは出来ない。三皇五帝何ものぞと叱咤するも、現實としては戰犯的デマゴグの走狗的でさへあらねばならぬ。全社會現象を打つて一團とし、現實化してゐる事實そのものを把住し、修正の道に出なければならぬ。

第三章 世間、出世間の不合理の混合

一

すべて宗教教團の改革修正は教祖に歸れ、祖師に歸れといふ標語に於て統一されてゐる。それほど一般的性質を以つた好ま傾向である。然しそれが嚴密に常にさうしたものであるか何うかは、精密なる分析と探究とを要する。

産業と證道との關係に關する限り、原始教團の生活に歸れも亦、半ば眞であらうと共に半ば眞を失ふ。之は原始教團なるものが、上來考究された全社會の理想形態より組成されたものではなく、前時代、當社會の實情、實勢に依つて規定されたからである。次の一節が讀まれる。(Dutt, Early Buddhist monarchism p. 16)

「印度に於ける宗教的行乞の歴史が極めて古いといふことはよく知られてゐる。紀元前六世紀に於てさへも宗教的行乞者達は廣汎にして一般的有力なる團體を構成してゐた。彼等は社會的組織の外部に生活し、自治的によく組織され團體を組織してゐた。そこには又僧法と呼べる、多くの宗派的黨與があつた。後に有力になつたそれらの一つは釋

迦族の有名なる王子に依つて指導された。彼等の指導者として佛陀を認めたこの僧徒は、明らかに宗教的修行者の一般的性質を採用し、共通の習慣並びに慣例を踏襲した。」

かうした史實にはいろいろの見解があり、史料に依り諸種の異見を持つであらう。然し僧徒が自ら生産人ではなく、行乞人であり、法施と財施との相互關係に於て存立したことは、年代の新古を問はず、諸經典の明示する處である。世間の主とならば轉輪聖王、出世間に進むならば佛陀となるといふことが、對立的高貴の二範疇をなしてゐる場合は甚だ多い。出家、在家も亦對立的存在の範疇である。必ずしも一元化的ではない。在家の菩薩、居士も存在したが、概ね長者、豪士の生活基體に立ち、必ずしも土農、小賈客の類ではない。維摩居士は想像的存在であらうが、これとても土民の姿ではない。在俗であるが政治の煩を避け、俗權に遠ざかつて、思想教化に努力するといふ自由思想家的典型として描寫されてゐる。生産の勞作と證道の難行とを一身に兼ね、額に汗し、掌を右の堅きに練りながら不二法門の一黙に參透したのではない。描寫の風格に於ては威容堂々として出家の文珠を壓してゐる感がある。終日耕耘に疲勞し、辛くも口に糊することを得、加ふるに家族扶養の義務を果しながら、如露如幻の大法を了得したとは思はれぬ。かりにそれが出來たとしても萬人に強ふるといふことは無理である。

かゝる無理を強ひ、又この無理に對して疑を挾まなかつたのは、時代を前後して尙一定の形を止めてゐる神政制組織に對する信仰、神から特に恩寵づけられてゐる種姓、門閥、階級の如き一般通念を脱することが出來なかつたからである。佛教は四種姓の打破であつたがそれは全社會に及ばず、辛うじて教團内の進歩であり、そのことも立入つて検討するならば、情實又濫造的である。經典の一つには次の物語がある。新入少弱者の出家入門があつた際、先進の者は豫めそれらの家業、門地を聞き置く。事あつて侮蔑を必要とする場合、このことを公衆に告げる。少弱者の悩みは深く、この非法を佛

は叱責されてゐる。事實は別として、この種の情弊は簇生的であつたであらう。

二

云はゞ教團の性質なるものは、現在の理解形式に従へば、精神主義のユートピア建設であつた。世間的、俗權的社會から特に隔離し、ひたすら精神の向上を求めようとする努力に端初してゐる。生産的、物質的新社會の理想的小組織が、所謂空想的社會と呼ばれ、科學的構成原理を持たぬと指摘されてゐる容態にも類似する。新空想社會が一般廣範圍の歴史社會から隔離し得ないやうに、教團亦特に生産に關して一般俗世間より離脱することは出来ない。見ざる、聞かざる、云はざる底の外界遮斷に依つて、五慾のすべてを遠離しようとしたのであるが、結局この幽閉化は人間の大道に背馳してゐたのであらう。排他獨尊的進展に意味を持つと共に、人間の通性を閉却することは、心身並存の生命現象の自然ではなかつたのである。心、偏重の僧を枉けたと共に身、偏重の俗界を著しく狂妄化した。隔離的空想社會の實現不可能に酷似するのである。必然の理法を基體として、廣汎に進むべき大道に着眼し、心身何れの偏重をも矯正すべきである。

生産に證道悟入境の理想を飽和させ、證道修行に物資自給の生産基體を附與せしむべきである。耕し、働くものに教養の餘裕ある時間と活力とを與へ、學ぶもの、修むるものに勞務の必然を課する。この與奪に依つて不健全なる産業と、不足なる證道とが統一的原則に到着するであらう。限局された教團なるものの部分に止らず、全世界、全社會は悉く佛寶なる内證の悅樂を理想とし、それへの理論的瞭解を堅固にし、實踐への推進力を健實にするであらう。

從來儒家一般は、佛道を非難し、かりに世界悉く佛道に歸し、捨家棄慾の出家相を現出するならば、人類は終末するといふ。人類の終末如何は別の問題であるが、内面康樂の理想を把持する教團は正しく組織されたる世界と歩調を共にする

ことが出来、人類の幸福に向つて一大進境を劃する筈である。それは儒教の古代封建思想の階級的殘滓を捨て、全人類を一つに結合する三界萬靈教の本質を宣揚するに足る光輝を持つであらう。

三

原始基督教教會は神と人との愛を理想とする實踐集團であつた。それは僧寶に類比すべき性質のものである。神を中心とする同胞和合の愛に於て、それら各の平等性に於て、そして又働かざるものは食ふべからずの必要條件に於て、使徒さへも最初は働かねばならぬ點に於て、生産と修道との調和をさへ見出し得べき性質のものであつた。然しこの精神的法悅を中心とする教會も亦一つのユートピアンの運命を脱することは出来なかつた。それは世間的なるものと出世間的なるものとの交渉に於てである。出世間的の教會はもとより世間的慾望を抱懐するといふことはない。信するものの協同と共有さへも行はれてゐた。ホップハウスに依るならば、人々は共通目的の爲に結合し、恰も難破船の場合、乗務員が協同保全を期するやうに、共通目的の爲には個人が著しく讓歩、犠牲化するも辭せないといふ團結のものであり、それが基督教教會の性質であつて、宗教的同胞性の最上のものであつたことが出来る。(Encyclopedia of the social sciences, Macm. vol. III, p. 453)。然しこのありたき同信同胞の集團は、大なる世間的集團と別存するものではなかつた。世俗社會に包圍されながら、その中に存續發展するのであつた。かの皇帝のものは皇帝に返し、神のものは神に返へせといふ根本敎説の中には、世間と出世間との並存を認め、又混合雜住を認めてゐる。出世間のよきものを以つて、世間を純化させる可能も認められるが、又俗世間の善からざるものを以つて神の教會を汚損することも當然可能である。それは近代小理想社會、人爲的空想組織社會が、一般經濟法、政治的權力法に左右され、意の如く展開し難き事情にも比較される。もとよりユト

トビアン的存在が一般の思想、生活形態に暗示を與へ、何かの善き範と刺戟を與へてゐるといふことは云はれるであらう。そしてこの空想的、人爲的なるものが漸次擴大され、一般社會化する日も持つであらう。然しその時は最初の理想よりして著しく灣曲するものとなり終るべきである。原始基督教會も皇帝の社會情勢から相當の影響を受けるべき筈であり、又逆に與へる筈でもあつた。それは調和の形に於てと同じく争鬭の徑路とを持つた。互讓と與奪は相互的であつたであらう、然し二つが正しき理想に於て一致するといふことは不可能である。「基督教が國家宗教 (a state religion) となり、全帝國が名に於て基督教同胞となつた日に於ても、この種の深刻化する争鬭は落着するものではなかつた」(Ind.)。全基督教會の大を以つてしても尙理想實現に關しては空想的存在の外何ものでもなかつた。そして更にそれが現實性、實存性を實際の世界に樹立した時には、大教會そのものが理想性を殆ど喪失して了つてゐた。これが史實としての結果である。

これらの事實は佛教が國家的宗教の形を取り、王法佛法一體不二の結合を取つた時に於ても適用し得られる歴史の悲運である。教團大を爲す場合には出世間性は滅却し、僧寶は官僚化した。又國政は觀念化より一轉して迷信化する危險に及んだ。この危險を冒さざればやがて法滅の悲境を招き、國政亦未開の蠻性を脱することは出来ない。禍根は世、出世の二元並存に由來するのである。あらねばならぬ人間の理想たる人格の完成はたゞ一事である。この一事を靈肉、心身の二元に分割するといふ歴史的誤謬が數千年に互つて人間を不幸にしたのである。

四

世間、出世間の別、産業と證道の別は畢竟個人に心身の區別あることに淵源する。身は生理—肉體的基礎であり、これ

を維持する爲に必ず産業を必要とする。心は精神—生命完成の華實であり、この目的の爲に産業が整備される。生命の眞髓を正しく伸長させる爲に必要な物資の調整的産出が計劃企圖されるべきである。これは個人として、又單に要素的なる一人一員としての基本的原則である。この原則が正しく樹立されず、生命の目的と生産基礎の條件とが偶然的に結合されたり、機械的に混在して組織性を缺如するが爲に禍根を孕むのである。

この要素的過誤が社會的集團化するに従つて擴大され複合化される。正しき理想を備へざる生産と消費状態とが世間なるものを構成し、政權なるものを樹立し、強制力ある組織となる。誤謬この間に含まれてゐる。又正しき理想を持ちながら、このものを正しく實現するに當つて合理的基礎條件を礎立せず、常識的、時代慣習的な諸力に押され、特殊理想團體を構成しようとするのが出世間である。根の無き華實なるが故に成熟の能力を缺く、ユートピアンたらざるを得ないのである。

個人の場合、正しき生命目的は何か、それを實現支持する爲には何ういふ生産基體を要するか—解決の端をなすやうに、世間も亦、産業の正しき目標は佛寶を實現するにありとし、すべての組織をこのことに向つて集中することに依つて、解決の健全を期することが出来る。政權の如きも亦、成員の悉くをして、人格的完成を具現する目的を以つて、正しき規制を擁立する必要條件として存立の意味を持つ。歴史に現象し來たれる多くの政權は、成員の人格完成の眞義に徹せず、寧ろそれらを奴隸化し、蒼生と呼んで草木化する理想をさへ標示した。野性、蠻性を脱し得ざる理由である。かゝることの整理に依り、出世間的教團はユートピアンたることを離れて全世界と合致し、俗權的世間なるものは正しき組織の基礎として存立を純化するのである。

俗俗の一致、在家出家の差別撤廢の如きは單に教團内部の問題ではなく、全社會機構の新しく擁立されねばならぬ基本

原則である。特殊團體として教團が僧俗の區別を撤去することは目前に於ける些少の修正を現出するでもあらう。然し結局ユートピアン内部の更改に過ぎない。このことさへも正しく運用しなければ出家僧侶の俗化、俗權化を誘導し、又在家生業者の空想的怠慢と未熟野狐性の増上を弊害化するかも知れない。すべて鹹水の大海中に清水の池を圍み、紅白の蓮華を開華結實ささうとする難事に屬する。この種の難事たることを覺悟して情弊を避け、心身理想の一如に組織化し、更にこれを全世界に開示することの端を開く試練道程として意味を持つのである。一人格としての完成事を證道と産業とに區別したことが、教團出發最初の遺漏であり、それは又全社會、全人類の認識に於て、合理的な確實性を樹立し得なかつた過誤に起因するのである。

家事、家族、在俗事項の自然要求的のものと、出家性との關聯に關しては一層重要な事情を含むのであるが、考究を他日に譲る。